

大学生の友人関係における主張性と愛着スタイルの関連



加藤里奈・鈴木智帆・檜山日奈子



【着想の経緯】

友人に対して自分の意見や考えを言えなかった経験

→個人のパーソナリティや対人関係の持ち方の基盤となっている

『愛着スタイル』が言えるかどうか(主張性)に影響しているのではないかと

低い自己評価・
自信のなさ



対人関係
への不安

【目的】

愛着スタイル別に、自己表明と他者の表明を望む気持ちのバランスを検討

→2側面とも表明内容を分けて関連を検討



【方法】

①対象者：本学の学生210名(有効回答:194名)

②調査票

- (1)フェイスシート(学年・年齢・性別)
- (2)自己表明尺度(柴橋,2001)
- (3)他者の表明を望む気持ち尺度(柴橋,2001)
- (4)一般他者版成人愛着スタイル尺度(中尾・加藤,2004)

→(2),(3)は友人関係一般, (4)は対人関係一般を想起させた



【用語説明】

主張性：自他尊重に基づく自己表現のあり方(平木,1993)

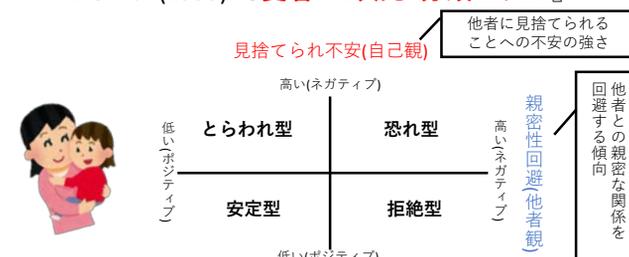
→測定：「自己表明」・「他者の表明を望む気持ち」

(柴橋,2001)

愛着：人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき(遠藤,2005).

→パーソナリティや対人関係の取り方に長期的に影響

Brennan(1995)『愛着の2次元4分類モデル』



【結果】

愛着スタイル別の平均値・標準偏差

(※愛着スタイルは見捨てられ不安・親密性回避得点の中央値(Me=3.97, Me=4.09)を用いて4つに分類)

	安定型 (n=53)	拒絶型 (n=44)	とらわれ型 (n=45)	恐れ型 (n=52)	分散分析の結果(主効果)	
					見捨てられ不安	親密性回避
自己表明						
限界・喜び	3.50 (0.34)	3.03 (0.44)	3.45 (0.39)	2.98 (0.39)	n.s.	F(1,190)=70.33** 低>高
意見	2.68 (0.48)	2.41 (0.54)	2.45 (0.42)	2.26 (0.49)	F(1,190)=7.15** 低>高	F(1,190)=10.70** 低>高
不満・要求	2.51 (0.52)	2.17 (0.46)	2.33 (0.43)	2.17 (0.65)	n.s.	F(1,190)=11.09** 低>高
他者の表明を望む気持ち						
相談・依頼	3.64 (0.48)	3.50 (0.52)	3.64 (0.35)	3.48 (0.46)	n.s.	F(1,190)=4.97* 低>高
独自の意見	3.49 (0.48)	3.27 (0.52)	3.44 (0.45)	3.25 (0.42)	n.s.	F(1,190)=9.59** 低>高
抗議・注意	3.66 (0.44)	3.44 (0.46)	3.51 (0.44)	3.48 (0.48)	n.s.	n.s.

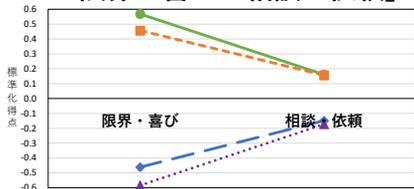
親密性回避が低い方(つまり、他者観がポジティブな方)が、自己表明も他者の表明を望む気持ちも高かった。

他者の表明を望む気持ちは全体的に非常に強かった。先行研究(川上・兒玉,2011等)他と同様の傾向。

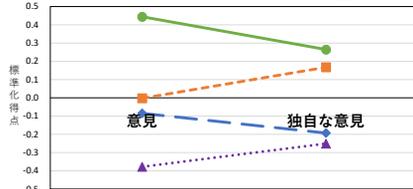
左表の得点を標準化得点に変換して作図(平均値を0に設定した)

**p < .01, *p < .05. 交互作用は有意ではなかった。

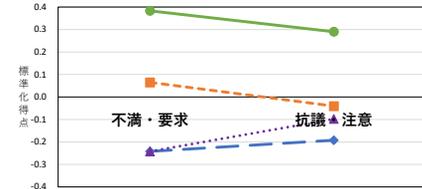
「限界・喜びと相談・依頼」



「意見と独自の意見」



「不満・要求と抗議・注意」



【考察】

主張性：他者観ポジティブ>他者観ネガティブ → 他者への価値観が安定していると主張性が高い

- 安定型(●)：2側面のバランスが取れている → アサーティブなコミュニケーションを行っている
- とらわれ型(■)：友人の意見を望む気持ちが強い,友人の不満・要求を聞く姿勢が弱い
- 拒絶型(◆)：友人の意見を聞く姿勢が弱い
- 恐れ型(▲)：2側面のバランスが取れていない

